



日本人の 心が動く

心 あ つ た か ニ ュ ー ス

NMCAA
NO3

2016年の映画で「殿利息でござる」は江戸時代に実際にあった話で、原作は磯田道史の「無私の日本人」これは国恩記をもとに書かれました。仙台藩の吉岡宿というところは、とても貧しい街で、住人が減っていききます。その貧しさの原因は、伝馬役とあって、年貢の他に藩が人馬を強制的に徴発していくという制度のためでした。このままでは、この町がつぶれてしまうと嘆いていた造り酒屋の穀田屋十三郎は知恵が働く友人に相談します。そして藩にまとまったお金を貸し付けて、その利息を街の人に配って、伝馬役の負担を軽くすることを考えます。当時としては、斬新で前例のないアイデア。しかもまとまったお金の額は現代の3億円。有志でお金を工面しますが、一人3000万円以上の大金です。有志が集まったメンバーは家財、衣類、家屋敷を抵当に入れて工面します。お金を出したメンバーは9人。二人の街の人を想う熱い思いが人を動かしていきます。この話を聞き

つけた、街の貧しい人も出資者を増やすことに奔走して、この実現は街の悲願となります。なんとかお金を集めると、今度は藩からは許可をもらえず、話が何度もつぶれかけますが、忍耐とみんなの知恵で乗り越えます。十三郎の本来、浅野屋は弟が跡を継いでいました。養子にでた十三郎は知らなかつたのですが、父は生前からコツコツお金を貯めていて、何代かかっても良いから、この街が立ち行くように使って欲しいと遺言していて、この家ではその思いがみんなに浸透して、家を潰しも・・という気持ちでした。全員が身売りしてでもという気持ちで藩を動かします。代官も奔走します。やり手で癖のある役人の心も動かします。9人は、藩から褒美のお金をもらいますが、そのお金さえ、街の人に分配します。浅野屋は多額のお金を出資したために、家が潰れそうになりますが、今度は藩主、お殿様が浅野家に訪れて浅野屋のお酒に命名します。お酒は評判を呼び、家は潰れずにすみました。この街は江戸時代を通じて人工が減らずに今に至っています。無私の日本人より)さて現代、著書の磯田さんのところへ一枚の手紙が送られてきます。自分のところにはこんなすごい人

達がいいた、ぜひ本に書いて残して欲しい。調べた磯田さんは号なり映画にもなりません。いろいろな人の心が動いていきます。映画のなかで殿様役にフギユアスケートの羽生結弦選手が出演しています。最初は断った羽生選手も内容を知って出演を決めます。磯田さんは「この国にとつてこれなのは、隣りすぎしくなることではない。本来にこわいのは、本来日本人がもっているこのきちんとした確信が失われることである。」と述べています。心が動くもとは誰かのために一生懸命。日本人の、心の核に響くものが無私なのだ。私は思いました。私達に流れている清いものを、混迷しているこの時代だからこそ強く持ち続けたいものです。